

Title	フランス語の読解指導における精読と多読の効用について
Sub Title	Lecture "intensive" et lecture "extensive" dans l'enseignement du FLE
Author	平松, 尚子(Hiramatsu, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2009
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.96, (2009. 6) ,p.165(112)- 177(100)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00960001-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランス語の読解指導における 精読と多読の効用について

平松 尚子

日本での外国語教育において、読解は常に重要な位置を占めてきた。従来から行われてきた精読 (intensive reading) は、客観主義的教授法にカテゴリーされるものであるが、現在に至るまで、読解指導の事実上の主流となっているように思われる。一方、多読 (extensive reading) という学習方法は、英語教育と、外国語としての日本語教育の分野ではすでにさまざまな研究と試みがあるが、フランス語教育 (あるいはその他の外国語教育) の分野ではいまだ研究・実践ともに乏しいのが実情であろう。しかし現在の第二言語習得理論においては、読解指導には精読と多読の併用が効果的だという見解が主流である。本稿では、フランス語多読の実践から得られた知見をもとに、フランス語多読の教材と、これを用いた教授法について検討したい。また、文学テキストを教材とするリーディング学習の新たな形態を模索するため、精読と多読を組み合わせた学習モデル構築の可能性について考えたい。

1. 精読

精読とは、「テキストの内容と言語的表現を深く、かつ詳細に分析しながら読む」読解法で、その目的は、「発音、語彙、文法、解釈などについて総合的に学習し、正確に読む力を伸ばすことと、知識を増やし教養を高めること¹⁾」である。外国語学習において伝統的に広く用いられてきたこの

ような精読法や文法訳読式教授法は、細部の情報処理から全体への理解を導く読みであるから、ボトムアップ・モデルと呼ばれている。「テキストを読むときに、1つ1つの単語の知覚から始まり、徐々により上位の構造、すなわち句、文、段落、さらにはテキスト全体の意味理解へと進んでいく読み方ⁱⁱ⁾」で、外国語教育においては、以前からこのようなボトムアップ・ストラテジー (bottom-up strategy) による読み方が指導されてきた。

これまでの読解能力中心の指導法に対して、コミュニケーション能力中心の考えに立つならば、たとえば、学習過程において母語への依存度が高いために目標言語の運用力がつきにくいとか、書き言葉の習得が中心になってしまうとか、時間をかけて詳しく読んでいくために読む量が極めて限定的にならざるを得ない、などの批判がなされるであろう。しかし、そういった批判のひとつである「学習過程において母語への依存度が高い」ことを逆手に取るならば、精読法や文法訳読式教授法では、母語によって獲得された能力を助けとして知的に高度な内容の教材にアクセスし、テキストの意味内容を母語によって明確に把握することができる、という長所を見いだすこともできる。この点で考えると、こういった指導法において、学習者の読解能力における習熟度よりも高度な言語レベル、かつ良質な言語で書かれた文学テキストを教材とするメリットは大いにあるだろう。文学が言語を媒体とした芸術である以上、文学作品は、学習者の創造性と感性を涵養する教材として大きな可能性を持つことは言うまでもない。学習者のレベルや知的興味、学習目的などに応じて、さまざまな時代や地域の文学、また多種多様なジャンルのテキストを選択することが重要だろう。

しかしながら、文学テキストを教材とする授業は、特に精読法や文法訳読式の場合、教師による一方的な指導になりがちである。そういった形態が有効な場合もある一方で、学習者がより能動的に、主体的に読みに関わるようなストラテジーの形成を促す指導も、次にみる多読のような学習形態において可能である。

2. 多読

精読法に代表されるようなボトムアップ・ストラテジーに対して、読み手がより能動的な役割を担い、目的に即したリーディングを行うために、トップダウン・ストラテジー (top-down strategy) が1960年代後半から提唱され始めた。トップダウン・ストラテジーとは、「テキストを読むときに、1つ1つの単語や句などの低次レベルの意味に拘泥するのではなく、読み手の背景知識を活用しながらテキスト全体の意味を把握しようとする読み方ⁱⁱⁱ⁾」のことである。この方式を促進する読解指導法に、速読や多読がある。速読は、テキストから自分の必要にあった情報を素早く読み取る技能を養う学習法であり、多読は、学習者が自分の言語習熟度や興味に見合う本を自由に選択し、自分のペースで読みすすめていく学習方法である。ここでは、読解指導において学習言語に触れる「量」を増やすことができるといふ点で特に有効な、多読学習についてみていきたい。

多読とは、「意味を読み取ることを第一の目的として、大量に教材を読むこと」である。多読において学習者は、精読法が求めるような、細かい文法事項や語彙・語句といった言語形式の理解にとらわれすぎることなく、テキストの意味内容に対して意識を向けて、本から本へとかなりの速さで読みすすめていく。したがって結果的に多くの本を読むことになるが、大量に触れることによって目標言語での読解力を高めることを目的としている。教師から与えられた共通教材を読むのではなく、学習者自身が自分の学習言語レベルと興味にあった本を教材として選択し、それを自分の好きな速さで読み進めていくということが前提として受け入れられるならば、その後の学習に対する動機づけが維持されやすい。さらに、学習者自身が本を選ばなければならないことは、一般に、適書・良書の選択眼を養うことにつながるだろう。また自分のペースで読みすすめる過程では、学習者自身が自分の読みの理解度を自分で確認し、自身の読解活動や読解過程をモニタリングすることになる。それは最終的に、理想的な読書習慣を培うことにつながる。

2-1. 教材

多読学習を実施するにあたって、教材は、学習者の言語習熟度や興味に見合う、できるだけ多種多様な本を多く準備することが望ましい。教材となる図書は、学習者の関心や興味をひくもので、学習者が現在の学習言語レベルではほぼ全体の意味を理解でき、かつ未知の文法項目や語彙を「若干」含む読み物が理想的とされている^{iv}。このように、難易度の低い本から読み始めて徐々にレベルを上げるという読み方であるため、特に初期段階においては、絵本や児童書、段階別読み物 (graded readers) が教材として最も適している。

英語の多読学習者向けの段階別読み物としては、Penguin Readers, Oxford Bookworms, Cambridge English Readers など多数が出版され、内容・量ともに充実している。フランス語学習者向けの多読用図書としては、英語ほど豊富ではないものの、以下のシリーズが挙げられる。CLE INTERNATIONAL 社の“Lectures CLE en français facile”シリーズ、Didier 社の“Atelier de lecture”シリーズ、Hachette 社の“Lecture facile”シリーズなどである。各シリーズのレベル分けの基準や段階など詳細については、後に挙げる参考資料を参照されたい。フランス語を外国語として学ぶ学習者向けにリライトされたこれらの段階別読み物の他に、フランス語を母語とする子ども向けにやさしく書かれた児童書や絵本も多読用図書として用いることができる。たとえば Gallimard Jeunesse の“Folio Junior”シリーズは、ストーリーがおもしろく、刊行数も約 500 冊と充実しているので、中・上級者用の多読教材として適している。また、日本の漫画のフランス語版も多読用教材として使えるし、中・上級の学習者は、リライトされていない、いわゆる「普通の」フランス語書籍へ移行することももちろん可能である。

2-2. 指導法

一般的な多読の授業は、学習者が教室で一斉に、自分で選んだそれぞれの読み物を黙読するというかたちで行われる (持続的黙読 sustained silent

reading^{v)}。しかし、授業時間数の少なさが学習上の大きな障害となっている外国語学習において、学習者が一堂に会す貴重な機会である教室という場のダイナミズムを活かさないのはどうしても惜しいように思われる。また、授業時間が読書の時間として用いられ、あるいは速読などの読解技術の解説のために使われると、授業に学習者が集まる意義が失われやすいという問題が生じることになる。いずれにしても、教室という場の意義と、その場における学習者の活動を十分に考慮しないと、学習者が集まる教室という「学び合いの場」を十全に活かさないことになるだろう。また読みすすめる過程では、学習者自身が自分の読みの理解度を自分で確認していくことになるが、「読む」という行為が個人のうちに完結する営みである以上、自分の読解に対して他人の意見を知る機会はずももなく、指標を得るのは難しいと言える。こういった問題点を補完しようとするのが、水野邦太郎氏による多読教育プログラムのひとつである **Interactive Reading Community (IRC)**^{vi)} である。IRC の特徴は、学習者同士のコミュニケーションを重視していることである。読書は各学習者によって教室外で行われ、授業では、読了した本の紹介とその本についての学習者同士の議論が行われる。読書という本来個人的な活動を出発点として、学習者同士の意見交換というコミュニケーションを導入することによって、他の学習者の価値観に触れつつ自身の読解をより深めることを目指している。また、読了した本の書評は、教室での発表に先立ってインターネット上に公開することになっているが、教室でのリアクションを超えて、他のクラスや他大学の学習者たちとインターネットを介してコメントのやりとりを行うことが可能である。つまり学習者は、時空間を越えた他学習者とのコミュニケーションを通じて自身の読解を深めていくことになるのだが、IRC は、こうした「協調学習」を支援することによって、「自律的な読み手を育てる」ことを目指している。

この IRC の理念と方法を踏襲して、フランス語の多読教育プログラムが2005年から湘南藤沢キャンパス (SFC) で行われている。筆者は2006、2007年度の2年間にわたって多読授業を担当したが、この4学期の実践を

通じていくつかの点が明らかになった^{vii}。

フランス語の多読教育プログラムの開始に先立って、まずフランス語多読用図書として、メディアセンターの協力のもと、“Lectures CLE en français facile” シリーズや、“Lecture facile” シリーズ、“Folio Junior” シリーズなど、約550冊の図書がメディアセンターとフランス語セクションに揃えられた。また協調学習を支援するためのBBSシステムを構築し、運用に向けて準備が整えられた^{viii}。履修レベルは中・上級（学習暦1年半以上）に設定し、リーディング・マラソン^{ix}という仕掛けを導入し、最終的な読書量を評価基準のひとつとした。

具体的な授業の進め方は以下のとおりである。

原則：2週間に1冊のペースで本を読む	
授業外活動	<ul style="list-style-type: none">・好きな時に好きな場所で読書をすすめる・読後は400～800字の感想レポートを書く（使用言語は日本語）。原本からの引用を必ず入れ、日本語訳をつける。・この感想レポートを、授業前日の夜までに指定されたWebページに記述する
授業内活動	<ul style="list-style-type: none">・Webにアップした感想レポートにもとづいて日本語でプレゼンテーションをする（一人あたり約5分）（他学習者は感想レポートを読んでから授業に参加する）・その後プレゼンテーションの内容に基づき、5分間の質疑応答（使用言語はフランス語が基本）

4学期の実践を通じて、とりわけ次の3点が重要であることがわかってきた。1. 学習者が自分の言語習熟度に合わせた本（特に1、2冊目）を選ぶ際に教師の適切なアドバイスが必要であること、2. 読書を習慣化するための支援、3. 教師による適書・良書の紹介、である。つまり、読書の主体は学習者ではあるのだが、一連の活動において教師による教育的介入が非常に重要だということである。また2007年度からは初級レベルの学習者に対しても履修資格を認めたことにより、学習レベルの大きく異なる履修者が混

在するクラスになった。学習レベルの異なる学習者が混在するというクラス編成が可能なのは、多読学習の利点のひとつである。初級から上級レベルの学習者が集ったことによって、当然「学びの共同体」も変化したが、2学期間の実践を通じてみてきたのは、最終的にリーディング・マラソンに完走できるか否かは学習レベルによるものではなく、教室における学習者同士のコミュニケーションを通じて学び合うことができるかどうかにかかっているという興味深い結果であった。そのことを履修者が実際に読んだ本から確かめてみたい。

例1) 2006年度春学期履修、フランス語学習歴1年半の学生

冊数	タイトル	著者	出版社	シリーズ	ページ数	キロ数
1	<i>Le Petit Prince</i>	Antoine de Saint-Exupéry	Gallimard	Folio	97p.	30.0km
2	<i>Désiré bienvenu</i>	Claude Roy	Gallimard	Folio Junior	86p.	27.0km
3	<i>Villa aurore, Orlamonde</i>	J.M.G. Le Clézio	Gallimard	Folio Junior	112p.	39.0km
4	<i>Catherine Certitude</i>	Patrick Modiano	Gallimard	Folio Junior	95p.	25.0km
5	<i>L'Anniversaire de l'infante, L'Enfant de l'étoile</i>	Oscar Wilde	Gallimard	Folio Junior	80p.	31.5km
6	<i>La Petite Fadette</i>	George Sand	Cideb	Lire et s'entraîner	64p.	22.0km
Total						174.5km

これは、もともと本が好きで、日本語での読書習慣が身に付いていた学生の例である。母語の読解力が外国語での読解力にどのように転移するかについてはいまだ諸説があるが、多読指導においては、母語での読書習慣が、学習言語での多読をより容易にする傾向がみられた。またこの学生は、フランス語学習者用の段階別読み物ではなく、いわゆる普通の書籍から読み始めている。

例2) 2007年度春学期履修、フランス語学習歴半年の学生

冊数	タイトル	著者	出版社	シリーズ	ページ数	キロ数
1	<i>Vingt mille lieues sous les mers</i>	Jules Verne	CLE International	Lectures CLE en français facile, Niveau 1	63p.	21.8km
2	<i>Maman, ne t'en va pas !</i>	Rosemary Wells	Gallimard	Folio Benjamin	/	2.1km
3	<i>Solange et l'Ange</i>	Thierry Magnier	Gallimard	Folio Benjamin	/	1.0km
4	<i>Oh là là !</i>	Colin McNaughton	Gallimard	Folio Benjamin	/	2.4km
5	<i>Les malheurs de Sophie</i>	Comtesse de Ségur	Gallimard	駿河台出版社	/	16.0km
6	<i>Nana I</i>	Ai Yazawa	Delcourt	/	/	38.0km
7	<i>Drôle de zoo</i>	Georgess McHargue	Gallimard	Folio Benjamin	/	1.5km
8	<i>Les Misérables</i>	Victor Hugo	CLE International	Lectures CLE en français facile Niveau 3	63p.	20.1km
9	<i>L'action humanitaire</i>	Claire Julliard	CLE International	Lectures CLE en français facile Niveau 3	63p.	14.7km
Total						117.6km

例2は、履修レベルを拡げてフランス語初級者から上級者までが混在するクラスでの実施となった学期における一例である。学習歴半年という初級レベルの学生の読書歴だが、上級レベルの他の学習者の読みや選書眼による刺激を受けて、根気よく読書を続けた様子が見えてくる。この学生は同年度秋学期も継続して多読授業を履修しているが、リライトされた段階別読み物から、絵本や漫画のフランス語版を経て、“Folio Junior”を読みこなすに至っている。

すでに述べたように、この例は多読教育に学習者同士のコミュニケー

ションを導入することによって、各学習者の読解を深めつつ、リーディング・コミュニティを形成することを狙っている点が特徴である。加えて、読書中の辞書の使用について、一般的な多読教育とは多少異なる方式をとった。英語の多読教育のひとつ「100万語多読」の掲げる多読三原則に「辞書を引かない³⁾」というのがある。辞書の使用を控えさせるのは、読書の流れを止めないためとされている。もちろんこの原則の前提に、「辞書を引かなくても十分に楽しめるやさしい本を読むべき」という約束があつてのことである。しかしフランス語多読では、「辞書を引いてもいいけれど、読書の流れを妨げない程度にとどめる」ということにして、辞書の使用はそれぞれの学生に任せることにした。たしかに多読は意味理解に焦点を絞った活動 (focus on meaning) ではあるが、村野井が Doughty を引用して述べているように、「意味重視の言語活動において学習者が語彙や文法などの言語形式 (form) の使用につまづいたときが、言語能力を伸ばすもっとも重要な瞬間である⁴⁾」という推測にもとづいて、学習者が未知の言語項目に繰り返し出会ったときは、その場で、言語形式に注意を向けさせる (focus on form) 方が、言語習得によりいっそう効果的ではないかと考えるからである。実際、フランス語多読を履修している学生の発言に、「知らない単語に何度も出会って、それが重要な語だと思ったら、辞書を引いた方がずっと効果的」というものがあつたし、ある程度のスピードで次から次へと本を読んでいくという作業を続けるにつれて、それぞれの学習者が、多読における辞書との適切な付き合い方を各自で身に付けたように思われた。

また村野井は、多読指導の読後活動について、「深い理解や内容に関わる産出を伴った読後活動も多読に組み込む形で行って、記憶保持を決定する情報処理の量と質の両方を保証することが効果的⁵⁾」だと指摘している。たしかに、読了して終わりというのではなく、感想レポートを書くことによって自分の読みを振り返り、他学習者にその本とキーセンテンスを紹介し、質疑応答に答えるなどの活動を通じて、より深い言語処理を促す指導を多読に組み込むことは有効だろう。さらに、本を紹介し、その本の感想を共有する相手がフランス語母語話者あるいはフランス語使用者であれば、

共通言語のフランス語でやりとりをすることになるので、フランス語でのアウトプットの機会に繋がるだろう。

3. 精読と多読を組み合わせる

ボトムアップ・ストラテジーの指導として一般的な精読法と、トップダウン・ストラテジーを促進する指導法としての多読をそれぞれみてきたが、これら二つの処理が相互作用しながら読解が進んでいくという相互作用モデル (interactive model) が、現在では理論の主流となっている。この点からすると、精読と多読を組み合わせ、学習段階や学習目的に合わせてバランスよく指導していくのが、読解力を効果的に伸ばすために有効だと考えられる。たとえば、外国語としての日本語教育における読解教育では、基本的に初級では精読法が、中・上級へと進むにつれて速読法・多読法がとられているようである^{xiii}。このように、精読から多読へ連続して学習するように導く方法もあれば、精読と多読を並行して行う方法もあるだろう。連続学習の場合は、多読から精読という流れよりは、精読から多読へと指導する方が、既知の文法項目や語彙がより多い方が図書を選択の幅が広がるという意味で、より有効と思われる。並行学習の場合は、カリキュラム上で可能であれば、精読の授業と多読の授業を同時に履修してもらうことが望ましいし、そうでなければ、同一授業内で精読と多読の指導を行うことも十分に可能だと考える。その場合、教師が指定した共通教材を用いて精読を行いつつ、平行して、学習者が各自で本を選んで多読学習を進めていくという形態が考えられる。

精読と多読の組み合わせによる効用については、今後、フランス語における多読指導のケース・スタディがより充実すれば、精読との比較研究により、これらの指導法が相互補完的に機能するための、より有効なモデルが検討できるだろう。多読指導についても、教材やより効果的な指導法、教室内活動の充実など、さらなる改善の余地を残していると言えるし、本稿では触れることができなかったが、多読によって向上する読解能力や語

彙能力の測定と評価という問題については、今後さらなる研究の発展が期待される。

注

- i 白畑知彦・冨田祐一・村野井仁・若林茂則（著）（1999）『英語教育用語辞典』大修館書店，p.149.
- ii 小池生夫（編集主幹）（2003）『応用言語学事典』研究社，p.57
- iii 同上，p.57
- iv これは、学習者が現在の言語能力レベルよりも一段階高いレベルの理解可能なインプット「i + 1」に接触したときに言語習得が促進されるというクラッシュェン（S. Krashen）の仮説にもとづいている。
- v 榊井幹生（監訳）（2006）『多読で学ぶ英語 —楽しいリーディングへの招待』松柏社，pp.161–163.
- vi IRCの詳細については、水野邦太郎（2005）「本と人・人と人の絆を結ぶ互恵的な読書環境の創出」『コンピュータ&エデュケーション』Vol.19，pp.75–84，CIEC（コンピュータ利用教育協議会）他を参照のこと。
- vii 本稿では2006、2007年度の4学期にわたる実践を中心に述べるが、このプログラムは現在も継続して実践されている。詳しくは、伊藤敬佑・平松尚子・國枝孝弘・古石篤子（2009）「多読学習を通じた互恵的学習環境の構築 —その実践と可能性—」『獨協大学外国語教育研究第27号』pp.31–33，獨協大学外国語教育研究所を参照されたい。
- viii <http://french.sfc.keio.ac.jp/tadoku/>
- ix 読書量をマラソンの距離数に見立ててよりわかりやすく視覚化し、ゲーム感覚で読書量を増やしていく。400語を1kmとする。
- x 古川昭夫・伊藤晶子（共著），酒井邦秀（監修）（2005）『100万語多読入門』コスモピア，pp.22–23.
- xi 村野井仁（2004）「第二言語習得研究からみた多読指導」『英語教育』2月号，pp.30–31，大修館書店，p.31.
- xii 同上，p.30.
- xiii 小池生夫（編集主幹）（2003）『応用言語学事典』研究社，p.801.

参考資料「フランス語の多読用教材として使用できる図書（抜粋）」

フランス語を外国語として学ぶ学習者向けにリライトしたシリーズ

CLE INTERNATIONAL Collection “Lectures CLE en français facile” une collection de lectures dans un français adapté à l’apprentissage de la langue			
	niveau 1		400 à 700 mots
	niveau 2		700 à 1200 mots
	niveau 3		1200 à 1700 mots
	niveau 4		de 1700 mots et plus
Didier Collection “Atelier de lecture” une collection de lectures authentiques et accessibles aux adolescents un choix de romans contemporains et classiques une segmentation par niveau selon les échelles de compétences du CECRL			
	niveau A1		
	niveau A2		
	niveau B1		
Hachette Collection “Lecture facile” une collection de lecture en français pour se divertir, s’enrichir, perfectionner ses connaissances en langue, en littérature et en civilisation			
	facile	(jaune)	de 500 à 900 mots
	moyen	(rouge)	de 900 à 1500 mots
	avancé	(verte)	de 1500 mots et plus

フランス語母語話者向けの絵本・児童書シリーズ

Gallimard Jeunesse Collection “Folio Benjamin” “Folio Cadet” “Folio Junior”			
Folio Benjamin (139 ouvrages)	niveau 1	“j’ai envie de lire”	
	niveau 2	“je lis tout seul”	
	niveau 3	“je sais bien lire”	
Folio Cadet (181 ouvrages)	à partir de 7 ans à partir de 8 ans à partir de 9 ans		
Folio Junior (471 ouvrages)	à partir de 10 ans [...] à partir de 16 ans		
P’école des loisirs Collection “Lutin poche” “Mouche” “Neuf” “Médium”			
Lutin poche	0 à 3 ans, 2 à 4 ans, 3 à 5 ans, 5 à 7 ans, 7 à 9 ans		
Mouche	7 à 9 ans		
Neuf	9 à 12 ans		
Médium	12 à 16 ans		

引用・参考文献

- Day, R.R., & Bamford, J. (1998) *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge : Cambridge University Press [梶井幹生 (監訳)
(2006) 『多読で学ぶ英語 —楽しいリーディングへの招待』 松柏社]
- JACET SLA (編著) (2005) 『文献からみる第二言語習得研究』 開拓社
- 伊藤敬佑・平松尚子・國枝孝弘・古石篤子 (2009) 「多読学習を通じた互恵的
学習環境の構築 —その実践と可能性—」 『獨協大学外国語教育研究第27
号』 pp.31-33, 獨協大学外国語教育研究所
- 川村昌弘・水野邦太郎 (2005) 「学習者同士のコミュニケーションを通じた多
読を支援する Web アプリケーションの開発」 『教育システム情報学会研
究報告』 Vol.19, No 5, pp.23-28.
- 小池生夫 (編集主幹) (2003) 『応用言語学事典』 研究社
- 酒井邦秀 (2002) 『快読100万語! ペーパーバックへの道』 ちくま学芸文庫
- 酒井邦秀・神田みなみ (編著) (2005) 『教室で読む英語100万語』 大修館書店
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (著) (1999) 『英語教育用語辞典』
大修館書店
- 平松尚子・國枝孝弘・古石篤子 (2006) 「多読学習の試み —授業運営と環境整
備—」 *Rencontres* vol. 21, pp.35-39, 関西フランス語教育研究会
- 古川昭夫・伊藤晶子 (共著), 酒井邦秀 (監修) (2005) 『100万語多読入門』 コ
スモピア
- 水野邦太郎 (2005) 「本と人・人と人の絆を結ぶ互恵的な読書環境の創出」 『コ
ンピュータ&エデュケーション』 Vol.19, pp.75-84, CIEC (コンピュ
ータ利用教育協議会)
- 村野井仁 (2004) 「第二言語習得研究からみた多読指導」 『英語教育』 2月号,
pp.30-31, 大修館書店